

謹賀新年

リフレッシュ滋賀

第8号

連合滋賀・高退協会報

発行責任者:吉村眞明

編集責任者:嶋澤順三

大津市松本2-10-6

電話:077-523-0500

平成十二年 元旦
連合滋賀・高退協役職員一同

年頭にあたって

連合滋賀高退協

会長 吉村 眞明

新しい年二〇〇〇年が、お互いにとってよい年であることをお願いいたします。不景気の深刻さは底なし、全ての分野で無責任・恥知らずの行動・事件が次々と発生し、世紀末とも思える暗い世相のトンネルから抜けることが出来ない一九九〇年代でした。平という字を上につけた年号は凶で、それゆえ平治が一つあるだけ、その平治のときも反対論がしきりにあったのに、敢えて押し切り名付けると、平治の乱が起こった。という文章が頭の中に残っています。

昔の人ならこの世相をみて、平成という年号のせいにするでしょうが、私どもは現代人、前近代的な験をかつぐような気はありませんが、しかし、昭和から平成に変わるときに「平成」と書かれた年号を、満面の笑みを浮かべ、両手を押し伸ばしてテレビに字を出したのは、今の総理小渕恵三その人でありました。

この人の政治を終わらせることこそが、明るい未来を切り拓く第一歩だと思います。そのことは、前近代的でも験をかつぐことでもなく、極めて現実的なことだと思えます。

日本全体を覆っている将来不安を解消するには、政権交代しかありません。総選挙は間近であります。昔とった杵柄、連合現役の皆さんと一体となり、手足となつて、居住地で精一杯の活動をしようではありませんか。

今やらなくて、いつやれる、ガンバロウ。

当然のことではありますが、種まき段階とも言える高退協の充実発展に、お力添え下さるよう切にお願い申し上げます。年頭にあたってのご挨拶とします。

連合滋賀・高退協 第六回総会二月に開催！

高退協の総会は、九八年の第四回総会にて、毎年開催に規約改正され、九九年の第五回総会に続いて二〇〇〇年の第六回総会を左記の日程にて開催の予定です。

日時:二〇〇〇年二月八日(火)

一〇時三〇分

場所:つがやま荘(守山市)

連合滋賀・第六回定期大会

結成十周年記念式典・

レセプション開催される！

一九九九年二月八日、琵琶湖ホテル「瑠璃の間」において、連合滋賀第六回定期大会が開催され、高退協から三役(吉村会長、嶋澤、奥村両副会長、北村事務局長)が特別代議員として出席しました。

今大会では、『二一世紀へ。力と行動!』をスローガンに、二〇〇〇年に向けた運動方針が決定されました。

また、定期大会終了後には、結成十周年記念式典・レセプションが引き続き開催され、三百十名余りの出席者のもと、バンド演奏をオープニングに、連合滋賀十年の歩みのスライドや来賓挨拶、青年委員長の乾杯の発声で歓談にはいり、クロージングは、おうみ少女少女合唱団の初期生の歌声が披露され、約二時間の楽しいひとときでした。

滋賀県高齢者集会報告

集会日時 九月二二日 十時～十三時
於 滋賀県労働会館におの浜荘

講演要旨

演題

講師 津田直次先生

”川の水は流れても
川の底は流れない“

私は大正五年生まれですから、今年八三歳になります。二〇世紀と共に生きてきた一人として、二〇世紀とはいかなる世紀だったのか、をしきりに思う今日です。大正生まれの私にとって、明治の人たちに比して、やはりハナ、ハト、マメ（小学校一年生の国語の教科書第一ページ）の時代の人間であると痛感しています。さて、十九世紀のヨーロッパは世界を支配していましたが、このヨーロッパ支配は十五世紀の終わり頃、コロンブスがアメリカ大陸を発見した頃から始まっており、十六世紀には種ヶ島に鉄砲が伝来していますが、その後アジアはヨーロッパの侵略を受け、次々に植民地化されて行きます。しかし、日本だけ侵略を免れましたが、十九世紀半ばアメリカのペルーが日本へやってきて、明治維新の展開となります。アメリカという国は南北戦争でアジアへの進出がくれま

したが、アヘン戦争で中国への進出を果たします。

明治維新で日本は、欧米の知識文化をとり入れ近代化の路を歩みますが、中国は日清戦争で日本に敗れ、革命がおこり、日本に続いて近代化路線を進みます。二〇世紀に入って、アジアではヨーロッパの侵略に対抗する気運が生じますが、日露戦争における日本の勝利は、その大きな転換点となりました。その日本は、大正時代を迎え、大正デモクラシーの中で、日英同盟を結び第一次世界大戦に加わり、ドイツと闘います。ドイツは中国山東半島や南洋諸島を植民地にしていましたが、敗戦で撤退し、次いでロシアもレーニンの指示で撤退後、ロシア革命がおこります。世界大戦に敗れたドイツでは、その反動としてヒトラーのナチスが抬頭し、イタリアではムッソリーニのファシズムが抬頭、これが後の第二次世界大戦の引きがねとなります。

日本における大正デモクラシーとはなにか、それは明治勢力の終焉と共に、民衆の方向へ顔を向けたということですが、原敬の暗殺が軍国主義の出発点となり、関東大震災が恰も弔鐘の如く、大正デモクラシーが崩壊し、時代は大正から昭和へ移ります。昭和のはじめ金融恐慌がおこり、それと軍縮（一九三〇年ロン



ドン会議）が要因となって昭和六年満州事変がおこり、以来日本は昭和二〇年まで十五年戦争に突入します。

私は昭和十三年から日本敗戦まで兵役に従事し、各地を転戦してきましたが、その間に感じた各国の国民性といった面について若干ふれてみたいと思います。

▼フィリッピン（約2ヵ月滞在）

すべての国民に愛国心がなく、国民は顔をアメリカに向けており、アメリカに対する関心が強い。戦争は軍人の仕事と割り切っており一般国民にとっては無縁のことである。

▼ジャワ（約一年滞在）

人々は純朴で従順であり、信頼できる。

▼マレーシア

イギリスに対しては反英感情、日本に対しては反日感情が強く、独立運動を

展開する。

▼ベトナム

フランスに対する反感が強いが、性質は従順でありアイデンティティが強い。心売るようなことはしない。

その他ビルマ、朝鮮など各地を転々とし、さまざまな国の人たちのふれ合いを体験してきました。

時間がないので、戦後から昭和四四年頃まで省略し、昭和四五年大阪万博以降について、所感を述べます。

大阪万博は戦後二五年目に当たり大きな転換期を迎えていました。万博の入場者は六四〇〇万人といえますから、日本人の六割に相当し自分で歩ける人は全員参加したといえます。この頃なにがどう変わったのか。一つは地方（ローカル）文化が衰退し、あらゆる風俗、習慣などが都市型文化へ変化した。二つ目は世代交替が行われた。（大正五年生まれの津田さんも五五歳定年の年に当たる）、三つ目は新人類の出現で、この頃の新入社員は戦後生まれの所謂団塊の世代であり、現在ではリストラ対象者になっている。そして、戦前、戦中の人たちとの間に亀裂を生じさせた。戦後生まれの新人類を対象とする一般的な批判は、「教育されていない」「責任を負わない、責任をとろうとしない」「苦勞は避けて通る」の三点に尽きるといいます。

日本の経済は右肩上がりの成長を続け、情報化社会がやってくる。そんな中で昭和四八年第四次中東戦争がおこり、オイルショックの嵐に見舞われ、これを乗り切るため官僚と財界が結託し、官民の癒着が進むのです。そこから芽生えた悪



事は、最近になって次々と摘発されています。

一九七九年末、ソ連はアフガニスタンに侵攻しましたが、いまにして思えば、これがソ連崩壊の前兆でした。これから十年後の一九八九年にはベルリンの壁が撤去され、ヨーロッパから社会主義国が消滅したのです。そして、同時に情報化時代はその姿を露にしはじめ、今日のパソコン、インターネットの時代に至っています。このように時代の変化は急激ですが、にもかかわらず、日本の対応は後

手後手に回りました。何故、これほど先が読めないのか、結局、自分中心主義というか、自分しかみていない人たちが、今の日本には多いということです。視野が狭いエゴイストたち、その先頭にいるのが団塊の世代ということではないでしょうか。

私たちは日常的には喜怒哀楽の中で暮らしており、周囲は激しく変化しているように見えますが、しかし、世の中というのは、動くものもあり、動かないものもあり、動くものが正しいとはいえず、動かないものが誤っているとは限りません。団塊の世代以降の人たちに理解してほしいことは、日本の古いものの中に大切なもの失ってはならないものがたくさんあり、現代日本の混乱は、それらを見つめ直すことによって解決できることも多いと思うのです。そして、古いことでも、失ってはならないことは、次の世代へも伝えて行つてほしいと願っています。川の水は、たしかに休むことなく流れていますが、でも川底の水まで上回ると同じような早さで流れているわけではないのです。

(中小会議、関真一氏の速記録による)

(津田先生のお話の主旨は、温故知新ということに尽きると思います。新しいことから学ぶことも多い反面、古いことから学ばなければならぬことも又多い筈です。日本ではなんでもかんでも目先のことでだけに目を奪われ、古いことは一様に切り捨ててかまわない風潮は、国の将来を、あるいは個々人の将来を誤ることになるのではないか、と思います。津田先生、御講演有り難うございました。一編 呆子)



あることを、今更ながら改めて感じ入りました。

連合の森散策と箕面ハイキング 〜連合近畿ブロックハイキング〜

連合近畿ブロックでは、高退協会員の親睦を目的として「散策とハイキング」が、一九九九年十一月十八日に催されました。滋賀高退協として四名の会員が参加しました。当日は午前十時に箕面駅前に参加者およそ三百人が集合し、順次目的の連合の森を目指して約七キロの道のりを、健脚を競って歩きました。途中、箕面の滝で休憩し、その後一気に目的地にお昼前に到着しました。

お昼は各自用意したお弁当を青空のもと、滋賀グループの仲間で頂きました。

午後の集會に先立ち、今回大阪以外からの参加ということで、和歌山と滋賀の参加者四名が紹介されました。遠路から参加されたということで、拍手で歓迎して頂きました。

午後はまず「集會と自然教室」が開催され、連合大阪の英会長の挨拶、続いて兵庫森林管理署・神戸事務所の綾部さんの森林を守ることの大切さ、必要性、および皆さんの協力要請があり、森林管理署(元の営林署)の仕事が大切かつ大変であることを、今更ながら改めて感じ入りました。

引き続きNPPO自然と緑・理事長の石原氏の「地球環境・自然と緑を守る」と題する講話がなされた。お話の要点は緑を守ることの大切さとその緑を立派に育てるためには、根が非常に大切であるとの話がありました。詳細なデータおよび図で植物の成長のメカニズムの資料も用意されており、自然に親しむとともに、自然を大切にすることがより一層しつかりもって自然に接する必要があるでしょう。余興として集會が終わったあと、森林に関するクイズで過ごすひとときも設けられていました。

説明が終わったあと、植林された各県の木および連合の森の植林を、説明をして貰いながら見学しました。ちなみに滋賀県の木はもみじで、この木が植林されていました。連合の森では、以前に植林した木を大阪の人たちは懐かしそうに見入っていました。

森林見学のあとは、バスに分乗して各帰路の駅に向かいました。

【参加して感じたこと】

秋のさわやかな一日、ゆつくり森を散策できました。残念なことに今年は紅葉にはまだ早く、ところどころ部分的な紅葉で、一面紅葉の海は見られませんでしたが、滋賀からの参加は今回が初めてのこと、ちょっと遠いところではあるが、勉強にもなるので時には出掛けていろいろなひとと接するのも良いと思います。森林を守るためいろいろ努力がなされていることも、今回の参加で具体的に認識出来たのは収穫でした。

組織紹介

全通信退職者組合滋賀地区
(滋賀通友会)

全通信退職者組合は、全国協議会として道府県(地区)退職者組合を統括し郵政局単位に地方協議会が組織されています。

全国協議会は主として連合高退連と一体となって年金・医療・介護保険等の政治的行動や地区本部への情報提供や指導。地方協議会是对郵政局交渉や地区指導などです。

『滋賀地区(滋賀通友会)の組織状況』

滋賀通友会は一九七〇年に結成され来年三〇周年を迎えます。

組合員数は四三四名(一九九九年七月現在)



介護保険問題学習会 (98年2月13日)

支部別では、湖北七六名、湖東一一〇名、紅陽一三名、湖南六五名、湖西五〇名です。組織状況は、居住地組織とし、現職支部の区域内居住者を支部ごとに組織していますが、入会は、郵政関係職員(管理職含む)退職者で入会を希望

する者です。

『活動状況』

一、総会(年一回)各支部に定数による参加要請を行う

二、幹事会(構成九名。会長一、副会長一、事務局長一、事務局次長一、幹事五名)必要に応じ、年四〜五回

三、退職者の入会活動 現職支部と共同

四、自動払込み利用者拡大行動 手紙、訪問

五、地区主催レク関係(年一〜二回)

六、教育宣伝活動は、学習会年一回、機関紙「通友会会報」年四回(七・一〇・一・四月)発行、総会議案など臨時発行もあります。発送は郵送と手配り(手配り二支部、郵送三支部)

七、訪問活動は、共済金(共済本部よりの手配)の手渡による訪問(全支部)、会報の手配りによる訪問(湖北、紅陽の二支部)

八、地区役員による支部支援活動

『各支部の活動』

一、総会(年一回)全員対象(各支部とも)

二、幹事会(構成人員は支部判断)必要に応じ(年三〜四回)

三、支部主催レク。開催支部は三支部

四、活動経費は滋賀通友会より定額助成と活動の都度助成

五、その他は滋賀通友会と共同活動

高退協カレンダー

一九九九年

八月二十七日

近畿ブロック高退連第六回定期総会並びに国際高齢者年近畿集会

大阪府立労働センター「エル大阪」で開催され、滋賀より十五名参加

九月十五日

九九全国高齢者集会

東京体育館にて開催され、滋賀高退協代表として吉村会長及び池内幹事の二名が参加。

九月二十二日

九九滋賀県高齢者集会

におの浜荘で高退協傘下会員百名余の参加を得て開催。本紙二〜三面に関連記事あり。

九月二十五日

連合滋賀・第三回囲碁・将棋大会

組合員、OB合わせて六十九名が参加。

十月十二日

退職者連合第五回定期総会

東京、総評会館で行われ、吉村会長、北村事務局長が参加。

十一月十八日

連合の森散策と箕面ハイキング

滋賀高退協として初参加。本紙三面に関連記事あり。

編集後記

連合滋賀高退協の皆さん明けましておめでとーございませう。

今回は昨秋の高齢者集会の講演内容をお届け致します。参加された方はもう一度思い起こして、またご都合で参加されなかった方は津田先生のご講演要旨を第一読下さい。団塊の世代や新人類が世間ではいろいろ言われて居りますが、団塊の世代からのいい分や主張もあろうかと思ひます。これから益々日本の中心的役割を担って頂く皆さんの奮起を期待します。

あと一年で二十一世紀となります。二十一世紀はいろいろな世紀に例えられています。地球レベルでの環境を守ることが益々大切になって来ると思ひます。本当の意味での環境の世紀となるよう、前号記事の環境に関する主張や、環境保護運動への参加をお互いに心がけてゆきたく存じます。皆様方のご支援、ご協力をよろしくお願い致します。

年頭にあたり皆様のご健勝をお祈りいたします。

投稿歓迎!

会員の皆さんからの投稿をお待ちしています。原稿は左記までご送付ください。

〒520-0807 大津市松本2丁目10-16

連合福祉会館内

連合滋賀・高退協事務局